

来るべき
電子書籍時代を迎えて、
大学図書館はいま何を
模索しているのか。
慶應義塾大学メディアセンター
の試みを聞く。

プロジェク ト 学術書 電子化



2010年に入り、ようやく進みはじめた電子書籍化。

これは出版界だけの課題ではない。

すでに学術論文の電子化は当たり前となった大学図書館もまた、来るべき電子書籍時代にいったいどういう役割を担っていけばいいのか。利用モデルはどうするか。模索が始まっている。

慶應義塾大学メディアセンターでは、日本語の学術書を電子書籍化し、同図書館で閲覧・貸出するための実証実験を2010年4月より開始した。

同年8月には、第一回の出版社説明会を行ない、

12月には、数社の学術出版社の協力のもと、第一期実験を開始した。

実証実験をひきいる慶應義塾大学メディアセンターの入江伸氏に、その目指すところを話してもらった。

(このインタビューは2011年8月19日に行ないました)

危機感が生んだ 慶應義塾大学メディアセンターの 電子図書館構想

プロフィール◎入江伸(いりえ・しん)

慶應義塾大学メディアセンター本部
電子情報環境担当課長。

1955年新潟県生まれ。東京理科大学理学部卒。

1997年慶應義塾大学入職、三田メディアセンター配属。

デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構、

次期システム開発室を経て現職。

著作に『MLA連携の現状・課題・将来』(勉誠出版、2010、共著)、

『ブラジル日本移民——百年の軌跡』(明石書店、2010、共著)

など。



図書館内だけで

電子書籍化をおしすすめても

意味がない

慶應義塾大学メディアセンター（慶應義塾大学図書館）の電子図書館実証実験の話にいく前に、これまでの大学の電子図書館について少し話しておきます。

一九九〇年代に文部省が助成金を出して、大学図書館の電子化実験を行なったことがありました。

その代表的なものは、奈良先端大学の電子ジャーナルプロジェクト、京都大学での貴重資料の電子化、筑波大学での紀要電子化、東工大での電子データを使った I L L (Interlibrary Loan、図書館間相互貸借) です。実験そのものは意義があったと思いますが、時代的な限界もありました。たとえば奈良先端大学では、図書館が紙資料を断裁し、スキャニングし、データベース化し、サービスを行ないました。しかし、これらすべて図書館がコストを

かけて電子化するというモデルは、社会モデルとしては通用しません。しかも、電子化された資料は、自館の教員、学生しか見ることができませんでした。電子化というのは流通や生産の革命だから、流通なり生産が変わらないと図書館だけでやっても限界がある、とそのとき感じました。

二〇〇〇年頃から電子ジャーナルが普及し、現在では図書館予算の半分を電子資料が占めるようになってきました。これによって、研究者の資料の利用方法が大きく変わりました。研究者は図書館に向いてこなくても用が足りてしまふことになり、そこで、あらためて図書館の意義とはなんだろうという議論になりました。

一方、教育サービスの面でも、電子資料に置き換えられた書架をなくし、図書館の場所を教育利用の場所として提供するという動きや、

慶應義塾大学図書館で利用可能な言語別の電子媒体資料

	電子書籍(冊数)	電子ジャーナル(タイトル数)
英語	17,700	36,000
日本語	600	1,400 (商用100)
中国語		9,000
韓国語		1,400

(出典:2010/10/06 シンポジウム「大学図書館と学術出版社の連携

——電子学術書 利用実験の提案——」 田村俊作所長講演からの抜粋)

eラーニングなどの動きが進んでいます。資料提供、情報提供の場として、図書館はあたらしい試みを進める必要がある、ということが課題として浮上してきたわけです。

さらに、Google booksのように、図書館の蔵書資料がインターネットで読めるということになれば、図書館の蔵書数だけでは評価できなくなります。

アメリカの大学図書館では、販売されている目録データをすべて検索可能とし、そこから資料要求をできるようにすることによって、これまでのような資料収集を行なわない大学まで出てきています。

そういう中で、資料が電子化したら図書館に置く必要がないのだから、図書館はむしろユニーク資料の収集にこそ意味が出てくるという議論があり、図書館は蔵書数が一つの価値だったけど、そうではなく、その図書館しか持っていないユニーク資料があるかどうか価値だという話になっていくんです。

Googleの電子化の背景には 危機感があった

洋書・洋雑誌がデータベース化され、研究者はそれを使う。しかし一方、日本語の出版物はどうなるんだろうということも浮上しました。

そこで、慶應義塾大学メディアセンターでは、Googleと連携して、古い蔵書のスキャンを開始しました。日本の書籍をインターネットに載せないと、世界から日本語の本は無いと思われてしまうという危機感もありました。あるいは、アメリカの大学図書館にも日本の書籍はたくさん蔵書されている。それがスキャンされたら、日本語の資料を、日本人がアメリカのサイトについて読むということになってしまふ。それも困ったものだと思います。そこで、日本語で持っている慶應の資料を出そうということになったんです。

しかし、Googleとのプロジェクトで電

子化した資料は著作権の切れたものなので、比較的古い資料が多い。これを全文読めるようにしても学部生への直接的なメリットにはならないと感じていました。そこから、学生が使う資料を電子的に利用できる環境を提供できるようにしていくためには、今後、どんな資料をどんなふうに電子化できるのかという議論が始まりました。

慶應義塾大学の日吉キャンパスで図書館の貸出履歴を調べている職員がいたんですが、そのデータによると、学生は和書の貸出がほとんどで、それも新しいものだけでなく古い資料が使われている。特に、常に貸出状態となっている古い資料も多いという評価がでた。それで、この部分を電子的に提供すれば、貸出中で借りられないこともなく、書店で入手できない資料も利用できるし、図書館で貸出処理をしなくてもよくなる。その点でも、電子化プロジェクトを進めたいという話を持ち上がったわけです。

日本の大学図書館にはない 電子書籍の利用モデル

アメリカの大学図書館では、大学出版社との連携や組織的な合併も進み、新しい学術情報のあり方が模索されています。そのような動きは、Google Library projectでも多く経験してきました。

アメリカでは、大学図書館と出版会・出版社の多様なプロジェクトが動いていますが、日本では、いまだに大学図書館と大学出版社が離れたままで、新しい動きが生まれていません。また、大学図書館側だけでそういった新しい動きを作り出す力はありません。

生協の学生実態調査によれば、大学生の生活費は、七〇年代とほぼ同じ水準で、しかも、書籍にかける経費は減少を続けています。

一方、充実した授業を進めるために、多くの資料を要求する傾向があり、このままでは、教育が要求する資料数と学生の